

一市販の入浴剤などにも入っているのがメタケイ酸なんですよ。言ってみれば天然の保

ある。透明な湯に体を沈める。聞

メタケイ酸を豊富に含む浜平温泉は湯上りの後のしっとり感が抜群だ

&温泉ソムリエ・橋本秋子

東京 大田区 しんクリニック 辛浩基院長

糖尿病による合併症予防のスペシャリスト・辛浩基院長

名医の診察室

糖尿病は進行すると、3大合併症で知られる神経障害、網膜症、腎症のリスクが高まる。が、それだけではない。脳梗塞や心筋梗塞のリスクも急激にアップ！ そんな糖尿病の怖い合併症を防ぐため、今、新しい治療法のBOTや新薬が注目されている。合併症予防に長年にわたり力を注いできた名医が、その合併症予防の道を教える。

(医学ジャーナリスト・松井宏夫)

その名医とは、しんクリニック(東京・大田区)の辛浩基院長(54歳、東邦大・医卒)。そして、次のように話す。

「生活習慣に関わる2型糖尿病の人にとって、インスリン皮下注射の治療は、かつて最後のとりでのようにいわれていました。今は早い段階で、内服薬とインスリンを併用するBOTにより、合併症を予防できるだけでなく、最終的にインスリンの治療が不要になるケースもあるのです」

辛院長は、日本糖尿病



新治療法

合併症治療のため眼科も併設されている「しんクリニック」。将来的には腎臓ターも作る予定だという

BOTでインスリン注射から

糖尿病の合併症予防に尽力

解放



学会糖尿病専門医。国内では予備軍も含めて2200万人と推計される糖尿病だが、専門医は全国で約4500人しかおらず、専門医認定のハードルは高い。その数少ない専門医のひとりである。辛院長は、青山学院高等部2年のときに医大生のいとこの影響を受けて医師を目指し、東邦大学医学部を卒業するころに、糖尿病を治療する医師となることを決意した。

開院16年 失明者ゼロの実績

「内科は、循環器や呼吸器、消化器に若い医師の希望者が多い。でも、教授から『糖尿病はこれからの病』と言われ、人のやらないことをしようと思ったのです」

透析患者のおよそ半数を占める糖尿病腎症の臨床研究に情熱を注ぎ、合併症予防に尽力。恩師の教授が退官したのを機に、1997年に「しんクリニック」を開院。その後、合併症予防への熱意に変わりはない。熱

います。最近では、新薬によって治療の幅も広がっており、合併症を予防しやすくなりました。新薬の中でも注目を集めているのが「DPP-4阻害薬」。膵臓からのインスリン分泌を促すのは、インクレチンというホルモンだが、DPP-4という酵素によって分解されてしまう。それを防ぐのがDPP-4阻害薬である。週に1回の注射で効果を持続できる注射も登場し、治療の選択肢が増えた。

「インクレチンは、食後の血糖値が高くなったり、血糖値を食い止めている辛院長。すでに眼科は併設していますが、将来的には腎臓ターを作り、合併症で苦しむ患者さんをもっと救いたい」と。

ちなみに開院以来16年で失明者はゼロという素晴らしい実績。また、増え続ける糖尿病患者の合併症は、新たな治療で着実に遠のきつつある。

医学博士 日々是(アソチエ)

第23回 低い声は女性の本能を刺激する

男性が女性に性的に興奮する際に、低い声は女性に強い刺激を与えることが分る。さらには、妊娠や出産時に、低い声は女性の本能を刺激する。本能的に低い声は、女性に強い刺激を与えることが分る。さらには、妊娠や出産時に、低い声は女性の本能を刺激する。

よしだ・たかよし 灘中・灘高校、東学新聞研究所を修学医学部に入学。研究科・医学博士課程。赤門クリニック

BOTとは

BOT (Basal Support Oral Therapy)とは、経口薬に加えて、効果が20時間継続するインスリン注射を1日1回行う治療法。従来の経口薬は、膵臓にむち打ってインスリンを出させるよ

うだけでなく、少量のインスリンでの糖コントロールが可能。これまでの血糖降下薬では、低血糖状態が続くことでの弊害もあった。大規模な海外の疫学調査報告では、低血糖が継続されることで、肥満症を誘引し、さらには心臓の血管収縮